

まちや文化を創る！ コミュニティとしての図書館

演出家・「まちとしょテラソ」前館長

花井裕一郎



はない・ゆういちろう

1962年、福岡県生まれ。89年からフジテレビの番組演出を担当。94年からは NHK、TBS、日本テレビ、東芝 EMI で番組などを演出。2000年から長野県小布施町を拠点に文化活動を展開。07年12月から小布施町立図書館館長として新図書館準備室勤務。09年7月、小布施町立図書館「まちとしょテラソ」館長に。現在、全国のまちづくりで活動中。NPO法人オブセリズム代表。著書に「はなぼん わくわく演出マネジメント」(文屋)。

交流のまち、小布施

編集部 2009年にオープンした長野県小布施町の町立図書館「まちとしょテラソ」。交流の場、わくわくする情報を提供する場として演出され、図書館を超えたコミュニティスペースとして注目を集めています。当時、図書館の館長は全国公募されたそうですね。

花井 名誉職としての館長ではなく、一般企業のトップと同じように、先頭に立って行動する人が求められたのだと思います。小布施町民になって5年目くらいの時で、新参者でもない僕が館長になったことで、「えっ！ 全国公募したのに、町民かよ」といわれました(笑)。すごい人が来るかもと期待していたら、近所に住んでいる花井さんじゃないかという感じでした。

編集部 花井さんは、もともと東京でテレビ番組のディレクターをされていましたが、2000年に小布施に移住。きっかけは何だったのでしょうか？

花井 料理番組を担当していた時のことでした。長野県で50年ぶりに木桶仕込みの酒造りをアメリカ人が復活させ



「まちとしょテラス」の外観

たということ、小布施にある柵一市村酒造場の取材に來ました。その時は、おいしいお酒が飲めるかな、くらいの軽い気持ちでいました。ところが、これからの時代を生きていくために僕たちは何をしなければいけないか、生き方や文化のことなど、未来につながる議論を交わせる人たちにそこで出会ったんです。僕はすっかり、このまちの虜になりました。もつとこのまちに触れていたいと思ひ、東京での仕事をやりくりして毎月のように小布施に通うようになり、翌年には移り住みました。

編集部 江戸時代、小布施の豪商だった高井鴻山が、晩年の葛飾北齋を地元

に招いて創作を支援したという歴史があります。小布施の人たちは、交流や文化がまちを豊かにすることを知っていて、今も外の人を温かく迎え入れてくれる土壤があるのでしょうか。

花井 人とのふれあいの中で、まちが豊かになっていく。僕の周りには、そういう考えの人が多くですね。外から人が来れば、寄り集まって、みんなで議論をしたり食事をしたり。小布施の人たちは、客人を「もてなす」のが上手だと思います。「もてなし」や「ホスピタリティ」がこのまちの魅力ですね。人が来ることを「しようがないな」といながらも、楽しんでいきます。

編集部 もてなすことを楽しむ。それは、まちとしょテラスのあり方と共通するものがありますね。

町民のための図書館を 町民がつくる

編集部 花井さんは、昔から図書館に興味があったのですか？

花井 映像の仕事をやっていく上で、本屋と図書館はネタの宝庫でしたか

ら、よく利用していました。本屋でネタ拾いをして、リサーチは図書館でやるが多かったですね。小布施町に住むようになってからも図書館に行きましたが、興味深い本が置いてない。システムが行政的で、落胆したのを覚えています。

それからしばらくして、新しい図書館をつくるという話があって、町民による図書館建設運営委員会のメンバー募集がありました。これは絶対に参加したいと思ひ、僕も手を挙げました。

旧図書館は町役場の3階にあって、上がるにもエレベーターはないし、靴を脱がないといけない。とても不便な図書館だったんです。図書館を1階に下ろしたいというのが、町民みんなの願ひでした。そして、ただ1階に下ろすだけでなく、今の時代にあった図書館をつくりたい。それは、静かな空間で、本を読むだけの場ではないはず。図書館に、今までにない新しい価値を創り出すことがまちの発展につながるという町長の考えに、僕は共感しました。

編集部 まちとしょテラスは、「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」という、4つの柱による

「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」という理念のもとで建築されました。この理念が、素晴らしいですね。

花井さんは新図書館の館長になられて以後、町民のみなさんといっしょに新しい図書館をつくり上げていくことにこだわってきました。建設する前から町民の関心を高め、町民と徹底的に話し合い、町民の意見を最大限に尊重。2年間の準備期間中に、建設や運営などについて延べ50回以上の部会が開かれたとか。

花井 町民のみなさんから出てくる意見を断ることはしたくなかった。こうした意見は、もつと磨けばこうなるのだから、もう一度検討してみましよう。とみんなのアイデアを活かす。館長の花井がつくった図書館とか、建築家の古谷誠章さんがつくった図書館といわれたくなかったのです。あの図書館は私たちがつくった図書館だと町民のみんながいえるような、細部に渡っていろんな人の意見が盛り込まれた図書館をつくりたかったのです。

編集部 町民の意見を吸い上げていく過程が、この図書館づくりにとって大きな意味があったわけですね。

花井 そうです。みんなが同じ方向に向かって行くために、理念を明確にしました。だから、ぶれない。ぶれそうになつたら、そつちじゃないですよねと僕が修正していく。その中で、予算と規模を踏まえてやれることを設計者といっしょに具体的な形にしていきました。

”わくわく”が 交流と創造をつくる

編集部 花井さんが図書館づくりのキーワードにしたのが、「わくわくすること」。花井さん自身が、わくわくして図書館づくりにとりくまれ、それが町民の方々と図書館の運営スタッフみんなを巻き込んで…。そうしてでき上がった新図書館をみなさんがわくわくしながら利用されている。

花井 子どものわくわく、大人のわくわく、交わつたわくわく…。そこから生まれるエネルギーが「交流」や「創造」をつくり出してくれると信じています。

編集部 医療福祉生協でも、病院や診療所、介護施設などをつくります。建設委員会を立ち上げて、そこに地域住民も加わって、どんな施設がいいかにつ

いて意見を交わします。一人ひとり、みんな意見が違います。もちろん全部は取り上げられないので、合意できるものをつくって、形にしていきます。施設が完成して内覧会をおこなうと、組合員がいっぱい押し寄せて「この手すりは、私の意見でできた」とか、みんなが笑顔で語るんです。自治体の施設なども、本来このようにしてつくられるべきではないかと思えます。

花井 コミュニティと会話することが大切ですね。コミュニティが何をしたいのかをしっかりとリサーチしないと、どんなに新しい施設をつくっても従来のもものといっしょです。僕たちも、新しい図書館を建てる前に1年、建てながら1年、2年間じっくり話し合いました。名称をどうする、開館時間はどうする…。僕たちがつくった草案をたき台にして、話し合う時間をたくさん持ちました。これが大事だと思っています。

親しみと願いが詰まった 名称

編集部 「まちとしよテラソ」というネーミングの由来を教えてくださいな

すか。

花井 新図書館の名称も一般公募したところ、町民をはじめ全国から224点の応募がありました。この応募作品すべてを公開して町民に投票してもらい、上位数点を図書館建設運営委員会で審議しました。

「まちとしよ」というのは、町民のみんなが旧図書館のことを「町図書まちとしよ」と呼んでいたの、それを何とか残せないかという意見を採用し、名前の一部になりました。「テラソ」という言葉には、「まちを照らそう」という意味が込められています。かつて、この辺りは街灯が少なく、夜は真っ暗でした。塾帰りの子どもたちが家族の迎えを待っている光景を設計者の古谷さんが見て、設計段階から「まちを照らす行灯あんどんのような存在の建物」をつくりたいと考えました。そのコンセプト「照らそう」から「テラソ」という言葉が生まれ、「まちとしよ」と組み合わせで生まれたのが、新図書館の名称「まちとしよテラソ」です。

新図書館のオープン当初は、みんな、まだ「まちとしよ」と呼んでいました。それが段々と図書館としての機能だけじゃないというのが見えてくると、「テ



ラソ」と呼ぶ人が増えてきましたね。とはいえ、最初の1年は「うるさい！」と怒られることもありましたが。図書館の中で絵を描いている人がいれば、体操をしている人もいます。「何なんだ、ここは」といわれました。それが1年過ぎた頃から、「ここはテラソだからね」とみんながいうようになった。その言葉を聞いた時は、すごくうれしかったですね。

まちじゅうが 図書館になる！

編集部 小布施では町内の民家やお店など、ちよつとしたスペースに本棚を設置してコミュニケーションを楽しめる「おぶせ まちじゅう図書館」というプロジェクトがスタートしています。従来の図書館の枠を超えた活動は、とても興味深いです。



花井 これは、設計者の古谷さんがプレゼンテーション段階から提案していたアイデアです。小さい図書館なので、いづれ蔵書がいっぱいになる。だから最初から本を外へ出すことを考えようと、まちじゅう図書館というプロジェクトが生まれました。例えば、栗菓子屋さんに本棚を置いて、蔵書を置いていく。その本は誰でも借りられて、どの本棚にでも返せるようなシステムを構築する。

でも、コストがかかることがわかって、なかなか踏み出せなかった。そんな

ある時、寄贈本を受け取る際に、本棚ごと持って行ってくれという人がいました。そこで、本棚ごと奥の部屋から玄関に出せばいいのでは考えたんです。酒屋さんはお酒や肴の本を読むだろうし、それぞれのお店の個性が表れた本が店頭に並ぶのは面白い。これで行こう！と準備に3年かけました。定期的に古本市を開催して、まちの中に本がある状態をつくってスタート。現在、16軒の「おぶせ まちじゅう図書館」がオープンしています。

図書館は、人が集まるから面白い。本を媒体にして、人を集め、新たな交流を育むことで、コミュニティとして活用することが出来ます。ぜひ、病院などにも本を置いて欲しいですね。

編集部 病院には長期入院されている方もいるし、小さな子どももいます。病院に、気軽に利用できる図書館や図書コーナーがあれば、みなさん絶対に利用されると思います。まちじゅう図書館という発想は、あらゆるシーンで活かせそうですね。

花井 図書館は、本を借りられる、新聞が読めるだけではありません。図書館ができることは、もっとたくさんあります。

ます。本は人と人をつなぐ道具なのです。その本がある場所としての図書館が大切なのです。図書館はここまでやれるんだ！と、図書館自ら表現することが大切です。

豊かな100年後のために

編集部 花井さんは、昨年末に館長としての任期を終えました。現在は何をされてますか？

花井 図書館づくりのお手伝いをするNPOを立ち上げています。あくまで、僕たちが図書館づくりをするのではなく、図書館を必要とするコミュニティが中心となる。図書館や美術館などの文化施設づくりのお手伝いすることで、世の中をもっと豊かにしていきたいと考えています。現在、東北や長野県を手始めに活動をすすめています。

編集部 では最後に、花井さんの今後の夢をお聞かせいただけますか。

花井 100年後に、すごく楽しい、わくわくする世の中ができてほしいな。そうした100年後のために、僕は

今何ができるのかいつも考えるんです。やはり大切なのは教育です。そして、教育の場として図書館も必要だと僕は思っています。教育といっても受験勉強のような知識を詰め込む教育ではありません。僕たちは「自遊教育」という言葉で表現していますが、楽しみながら地域のことを知ったり、コミュニティにふれたりすること。それは図書館で育めることだと思っています。

編集部 豊かな100年後のためにも、わくわくする図書館がもっと増えるといいですね。今日はありがとうございました。これからもご活躍を期待しております。

花井裕一郎さんの サイン入り 著書をプレゼント!

『はなぼん
わくわく演出
マネジメント』

文屋

3名様



本誌綴じ込みハガキにて
ご応募ください。